

JASCT

ニューズレター

第5巻第2号

昭和61年(1986年)8月

発行人: 松本清一

印刷所: 絢文社

理事会からのお知らせ

第16回性治療研修会の開催(予告)

日時 昭和61年10月19日(日) AM9:30 ~ PM4:30
会場 日本赤十字中央女子短大講堂(東京・渋谷 日赤医療センター)
会費 一般 30,000円 会員 20,000円
主催 日本セックスカウンセラー・セラピスト協会(JASCT)

プ ロ グ ラ ム

- | | |
|--------------------------------------|--------------------|
| 1. エイズの性行動 | 4. 脳と性行動 |
| 2. インポテンスのトピックス
(第2回国際インポテンス学会報告) | 5. 女性の性感の科学 |
| 3. 未完成婚の診断と治療 | 6. 形成外科と sexuality |
| | 7. 私の Sex therapy |
| | 8. カウンセリング実習 |

(講師は現在交渉中です。)

第7回日本性科学会(予告)

日時 昭和62年5月10日(日)
会場 仙台市 宮城県医師会館
学会長 長池博子・長池優生保護研究所所長

※ 追って演題募集いたしますのでご用意ください。
詳細は次号以降でお知らせする予定です。

Vol. 5	JASCT事務所 長谷クリニック内 TEL03(475)1780 〒107 東京都港区青山1-1-1 新青山ビル西館3F
No. 2	

Sexology 事始め (第1回)

石 浜 淳 美

戦後のSexology 事始めは、なんと言っても敗戦4日目の昭和20年8月18日発令の、『国家売春強制命令』にあるといっても過言ではない。

政府は都道府県警察署長に対し、『進駐軍特殊慰安施設について』と題する指令を発した。その内容は、進駐してくるアメリカ兵のセックスを処理する機関の設立に関するものであった。

そこで、それまでの売春業者にそれを肩代りさせることにした。そしてその施設に対して、政府が補助金を出そうという、正に画期的なものである。

業者代表は夢のような話に驚き、どうせ大した補助金はないだろうと考えていたが、一説によると当時の金で、一金500万円也が支給されたという。これなら、もう少し多くふっ掛けておけばよかったと業界では思ったが、それも後の祭りであった。それでも当時の金の500万円は、今の金に換算すると、3,000倍として150億に当る。正に嘘のようなことが、混乱の社会情勢のなかで、わが国の為政者によって実行されたのである。

この特殊慰安施設協会は、通称RAAと呼ばれ、これに応募して集った女性が、全国から殺到したといわれている。

つぎに政府が考えたSexologyに関する政策は、こうした進駐軍兵士と日本女性との混血を危惧して、国家優生法と薬事法を改正することであった。すなわち、人工妊娠中絶を認めた『優生保護法』と、それまで禁じられていた『避妊薬』を認めるための法改正である。

このうち優生保護法は、本音とたてまえでいろいろな駆け引きがあったようだが、結局昭和23年6月23日参議院で、翌24日は衆議院でそれぞれ可決された。また翌24年1月24日、優生保護法施行令として、政令第16号および厚生省令第2号が公布された。

またわが国の避妊薬は、昭和24年4月29日に、戦後新薬第1号として、厚生省から製造販売が正式に許可された。わが国で造られた新薬の第1号が、避妊薬であったということもまた、Sexologyの歴史の中では注目に値することと言わねばならない。

その時許可された避妊薬は、なんと78種類にも達し、戦後新しく誕生した製薬会社（この中には一部屋だけのような会社もあったと言われるが）と、それまであった製薬会社のほとんどすべてが、避妊薬を製造したといわれている。また、わが国で『新薬』という言葉が生れたのも、この避妊薬が最初であり、現在の『新薬許可申請制度』が生れたのも、これまたこの時の避妊薬の許可からである。

当時の週刊誌によると、『若い男女にとって記念すべき日』と報道されている。これが大手企業による、いわゆるセックス産業の始まりである。また当時の新聞広告には、避妊薬に関する広告が堂々と掲載され、『一・二・サンブーン、三・三分』とか、『一姫、二太郎、三・サンシー』といった標語まで現われた。サンブーンというのは、日本衛生材料株式会社（現在のエーザイ）の避妊薬ブランド名であった。この意味は、サンブーン錠が膈内で3分で溶けるという意味を現わしたものである。また、サンシーというのも、おなじ大手製薬メーカー山之内製薬株式会社の避妊薬の商品名であった。

このようにみえてくると、わが国戦後のSexologyは、Sexologyを禁止している政府や厚生省によって開始されたというのも、誠に不思議なことといわなければならない。

性転換願望への therapist の対応

高知大学助教授 渡 辺 恒 夫
(人文学部心理学研究室)

自己の性別に違和感を抱き、異性化を願望する人々 (gender dysphoric persons) — 特に男性 — が、増加の一途を辿っていると思われる。筆者は、この現象に社会的背景を含めた様々な角度からメスを入れた一書 (『脱男性の時代』勁草書房、1986) をこのほど公刊したのであるが、ここでは、実地に参考になると思われる点を少し紹介したい。

1. 「異性になりたい」「性転換したい」といった訴えが、いかに倫理的に受け入れ難く思われようとも、最初から、説論したり本来の性に戻すような治療目標を設定したりすれば、client は二度と姿を見せなくなることはまず確実である。client は絶望に追込まれようし (transsexual の自殺率は高いらしい)、therapist も貴重な症例を取り逃がしてしまう。心を白紙に戻し、嫌いな性を演じなければならないという相手の心情を、たとえ同情はできなくても、尊重するようにしたい。
2. 何才頃からそのように望むようになったか、男 (女) であることの何が気に入らず女 (男) になれば何がどのように良くなると思うか、といった質問を導入としつつ counselling に入るのであるが、女性ホルモン投与のような「具体的」要求をするのが、gender dysphoric person の常である。これに対しては、「真性の変性症 (transsexualism) という診断が確定し、治療上必要とみとめられれば考慮したい」と答え、診断の確定には、一～二年はカウンセリングと各種検査の期間を置かねばならないことを説明する。Gender dysphoria への「治療」には、a. 身体の性に合わせて心を打ち直す、b. 心の性別に合うよう身体を作り変える、c. 心も身体もそのままにしておいて可能な限り「異性」としての自己実現を図る、という三方針があり、診断が確定し、b の方針が考慮に入れられて初めて、hormone にせよ surgical treatment にせよ必要性を検討できることを十分納得させねばならない。
3. この期間中に、重大な精神疾患がないか否かの精神科チェック、泌尿器科 (婦人科) での生殖腺検査を済ませておく (特に female transsexual には、子宮が小さい等の異常のある場合がある)。Counselling の主眼は、変性欲求の真の動機を自己洞察させ、併せて鑑別診断を進めるにある。すなわち、動機が、同性に愛されたいとか、鏡に映る異性としての自己像を完璧にしたい narcissism にあるのであれば、それぞれ、異性化型同性愛、異性装嗜好 (transvestism) と診断し、性転換には全く不適格である旨納得させよう。詳しくは拙書を参照されたいが、筆者は、真性の transsexualism という診断の決め手となるのは、「しっくりしない」「このままでは落着き、安らぎがない」といった、自己の肉体と性器へのたえざる違和感の有無であると考ええる。
4. この期間が過ぎ、かつ transsexualism の疑いが濃厚になれば、倫理的決断のときがくる。要求に応じ、hormonal treatment を開始すべきか否か (筆者のような非医師 counsellor であれば、hormonal treatment への recommendation を付けて適当な医師の下へ送りこむべきか否か) 倫理的に許容しがたいというなら、あえて真性の変性症の診断は下さず、男性なら顔面永久脱毛術を勧めるのがよいだろう。髭が生えなくなるだけでも心が安らぎ、強迫的な性転換願望が緩和されるもののようである。Transsexual を本来の性へと戻しうる心理療法は存在しないというのが現状なので、therapist の役割は、可能な限り「異性」としての自己実現を図らせることによって欲求不満を和らげ、自滅的な性転換欲求を軽減することに留まろう。筆者はといえば、transsexual の気分を鎮静させ、自己洞察への心理的ゆとりを与えることのある estrogen 投与は、ケースによっては認められるべきと考える。「手術は実現しなくとも、この程度でまあ満足」という状態で落着いてくれればそれに越したことはないからである。
5. 以上のような therapist のあらゆる努力にもかかわらず、なお surgical treatment へ固執されれば如何にすべきか。逃げを打つように思われようが、海外の、transsexual のための信頼の置ける相談機関を紹介するのも一つの手である。筆者は基本的には「転換手術」には賛成しがたいのであるが、おのれの倫理観を押し付けるのではなく、最大限のチャンスを与えるのも原則としたい (情報公開の原則)。Japanese transsexual との文通に専属の psychologist が応じてくれる機関としては、ベルギーの Beaumont society、米国の Rabyrith foundation 等があり、渡航後は権威ある clinic 受診のルートも紹介してくれる。
6. 筆者は、少し調査してみて驚いたのであるが、「患者」としてではなく非正規なルートで女性ホルモンを入手している例が少なからずあった。国内で「手術」をしたという人物にさえ出会ったことがある。しつかりした治療体制の外側で変性への道を歩ませてしまうことこそ最も避けねばならない事態であり、そのためには、倫理観にそぐわない要求をされても以上述べてきたような方策をこうじて最後まで client の運命を見届けたい。専門を異にする therapist の協議の下に、また結果をたえず公表しつつ進めるならば、社会的問題の発生は防げよう。(なお、Standards of care: the hormonal and surgical sex reassignment of gender dysphoric persons (1985) 御入用の方、その他関心のおありの方は当研究室 0888-44-0111 まで連絡されたい。)

事務局からのお願い

新年度会費

10月より新しい年度(昭和61年10月1日～昭和62年9月30日)に入りますので、年会費15,000円の納入をよろしくお願い致します。

なお、今年度会費15,000円をまだ納入されていない方は、2年度分の納入をお願いします。手数料が無料となります会の郵便振替用紙を同封しますのでご利用下さい。

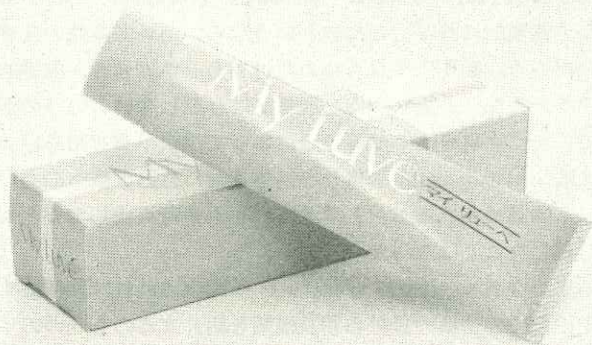
銀行振込みの場合は 横浜銀行 青山支店 普通預金 918-042002 です。

ニューズレターへ投稿して下さい

ニューズレターは会員皆様のものです。そこで会員の声ともいえるべきスペースを作って、お互のコミュニケーションを密接にしてゆきたいと考えております。性に関する御意見、日常活動の様子など、情報交換の場になることを期待しております。どんなことでも結構ですから投稿をお待ちしております。

また、ニューズレターに関する御意見や御提案がありましたら、遠慮なく編集部までお寄せ下さい。

届 先 JASCT事務局 編集部
〒107 東京都港区南青山1-1-1
新青山ビル西館3F 長谷クリニック内



潤滑ゼリー マイリュベ

本商品は優れた潤滑ゼリーとしてその安全性を含めて自信をもっておすすめいたします。

- 濃度・粘度をよく調整して適度な滑らかさを保持しています。
- 刺激成分を含まず、無色透明・無臭です。

資料・試供品ご希望の方はお申し出下さい。

タイシン製薬 株式会社

〒150 東京都渋谷区神宮前6-12-18 ☎03(400)9887

＜あっせん方法＞

会員の方には特別価格であっせんいたしますので、下記要領により、JASCT事務局あてお申込み下さい。

記

1. 申込方法 所定振替用紙による(お申込みの方に用紙をお送りします。)
2. あっせん価格および申込単価
 - ・ 40g入り 単価 700円(定価1,200円) 申込単位 12個
 - ・ 120g入り 単価 1,150円(定価2,000円) 申込単位 6個

※ 説明用資料および試供品ご希望の方は、JASCT事務局にお申し出下さい。